

ISSN 0910-2396

野鳥だより

—北海道—

北海道野鳥だより第183号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成28年3月21日

ホシムクドリ



2015. 4. 2 名寄市 名寄川河畔

撮影者 大阪 徳美 (旭川市)



も く じ

日本に渡来するコクガンとは	道東コクガンネットワーク	藤井 薫	2
インドガン漂流記	岩見沢市 先崎 啓究・先崎 愛子	北広島市 先崎 理之	6
路上の鳥たち	美唄市	藤巻 裕蔵	8
シルバ通信⑨ 極寒の北海道に留まる鳥たち	北海道大学農学院 森林生態系管理学研究室	河村 和洋	10
バードウォッチャーズ スケッチブック (その1)	札幌市中央区	本間 康裕	11
野鳥情報コーナー			
カラフトムシクイの観察記録	札幌市白石区	佐藤ひろみ	12
ハイイロガンとの出会い	江別市	若狭 隆	13
石狩の浜でハマヒバリ	札幌市北区	山中 勇	13
表紙の鳥 (ホシムクドリ)	旭川市	大阪 徳美	13
探鳥会ほうこく			14
鳥民だより			15
探鳥会あんない			16

日本に渡来するコクガンとは

道東コクガンネットワーク 藤井 薫

世界のコクガン

世界全体ではコクガン(英名: Brent Goose 学名: *Branta bernicla*) は北半球を中心に50万羽が生息していると推定されています。その分布と繁殖地の様子を示したのが図1ですが、実は少々面倒なことにコクガンの亜種と分布については研究者によって議論が分かれ、定説が定まっていない状況にあります。

有力な説としては、シベリア北極圏以西からヨーロッパに分布している亜種ネズミガン (*B.b.bernicla*)、グリーンランドからカナダ北極圏に分布している亜種シロハラネズミガン (*B.b.hrota*)、極東北極圏からアラスカ北極圏に分布している亜種クロネズミガン (*B.b.nigricans*) の3亜種説。上記の3亜種に加えて、亜種ネズミガンと亜種クロネズミガンの間の極東北極圏に分布している亜種コクガン (*B.b.orientalis*) を加える4亜種説。更に亜種ではなく、ネズミガン、シロハラネズミガン、クロネズミガン(コクガン含む)を独立した種であるとする説の3つなどがあります。

現状では各国がどれを採用しているかはそれぞれですが、日本では日本鳥類目録改訂第7版(2012)で、日本産コクガンは*B.b.orientalis*となっているので、4亜種説ということになります。どれ程の影響があるかは定かではありませんが、国際鳥類学会議IOCが編集しているWorld Bird List Ver5.1(2015)では亜種コクガンは記載されておらず、3亜種となっています。つまり、亜種コクガンと亜種クロネズミガンは研究者や国によっては同一亜種とされているか、亜種コクガンそのものが存在していない扱いとなっています。ちなみに、日本鳥類目録第4版

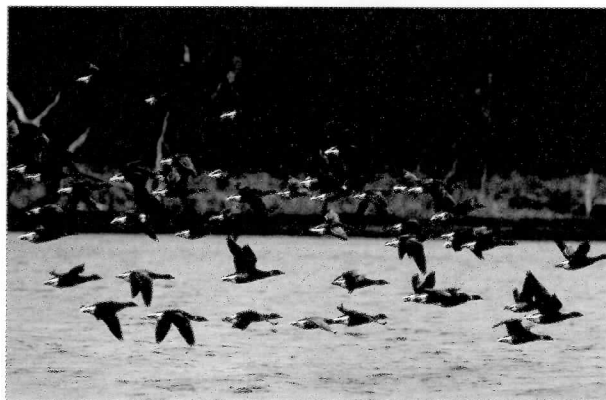


写真1 2015年11月 野付湾上を飛ぶコクガンの群れ

(1958年改訂)以後に、現在と同じ記載の亜種コクガン (*B.b.orientalis*) となっており、第3版までは日本でも亜種クロネズミガン (*B.b.nigricans*) をコクガンと表示していました。

では、日本に渡来しているコクガンは何者なのか?という大きな疑問があります。これについてはアラスカ北極圏で繁殖している亜種クロネズミガンが1986年以降、35,000羽以上標識放鳥されており、その追跡結果によると、多くは北米西海岸を南下しメキシコ湾等で越冬するものの、その一部が日本にも渡来している事が分かっています(標識を装着された9羽が宮城県などで観察された)。また、ロシアの研究者は極東北極圏のクロネズミガン(コクガン?)も北米西海岸と東アジアの2つに別れて渡っていると考えています。最新の情報ですが、2014年1月21日に宮

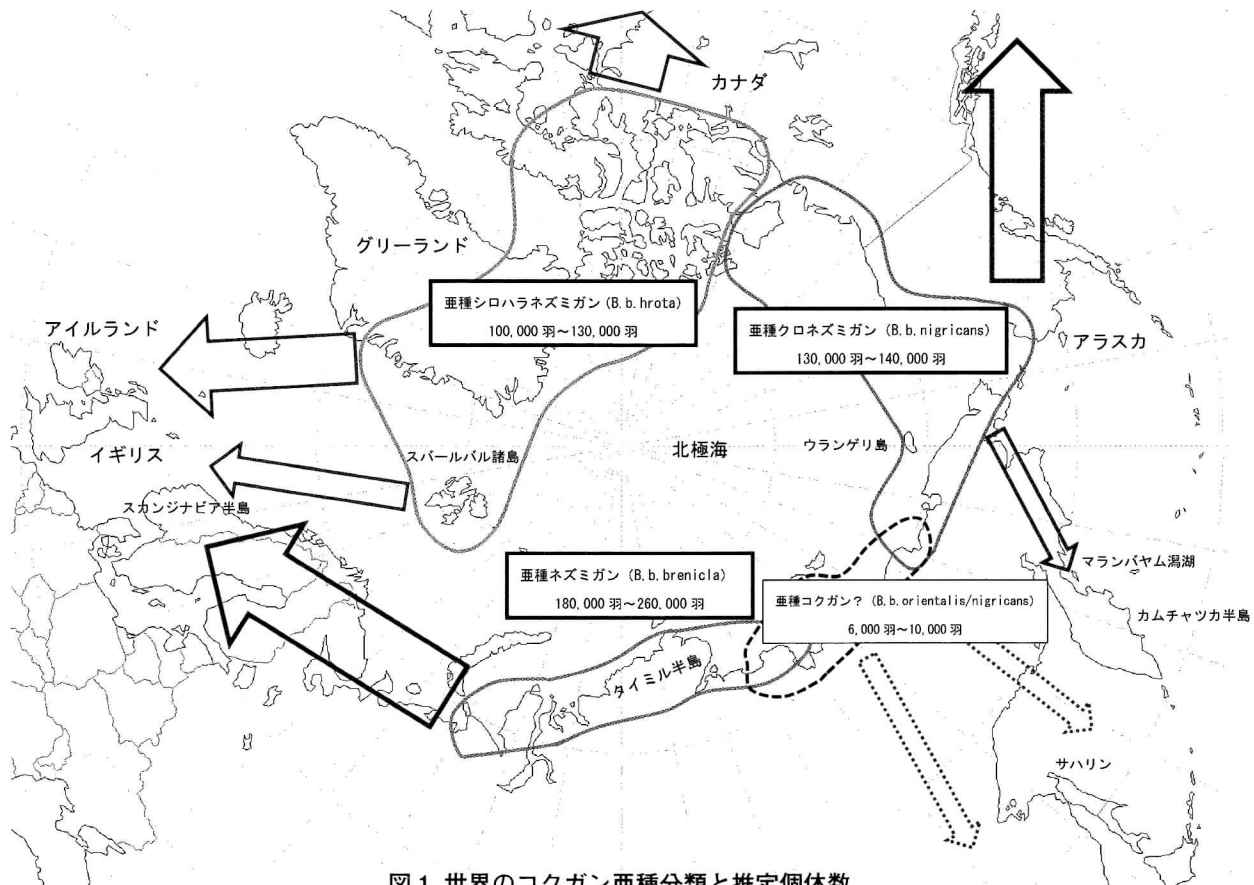


図1 世界のコクガン亜種分類と推定個体数

城県気仙沼市大谷海岸で放鳥された9羽のコクガンのうち1羽が2015年6月上旬にロシアのレナ川デルタ東側で回収されたとの情報が届いています。

つまり、日本に渡来しているコクガンは、北米アラスカとロシア極東の2つのルートから渡来している可能性があり、その数は10,000羽程で、世界のコクガンの僅か2%に過ぎない希少な個体群であると考えられます。また、亜種コクガンの存在は分かりませんが、少なくとも亜種クロネズミガンが冬季に北米アラスカとシベリア北極圏から日本に渡来している事は明白な事実です。

そして、韓国南部で100羽程、中国南部で4,000羽から5,000羽のコクガンが越冬しているとの情報もあります。この群れが日本を経由しているのか？大陸に沿って渡ってくるのかは不明ですが、秋季に道東を通過していく推定8,000羽以上のコクガンが、越冬地である道南・本州以南では、多く見積もってもその半数以下の数しか記録されていない事から、この韓国・中国南部で越冬するコクガンの群れとの関連性を考えたいところではありますが、現段階では分かりません。いずれにせよ今後は日本のコクガンは、東アジアの個体群としての見方により広く研究していく必要があると考えます。

道東のコクガンの渡来状況

コクガンはかつて、マガンやヒシクイといった他のガン

類が数万羽単位で渡来している状況と比較して、分布は広いが数としては全国的には、それ程多い鳥という印象はありませんでした。それが秋季から冬季にかけて、1,000羽単位で渡来しているらしいとの情報が、1970年代後半から、根室地方を中心に、鳥類保護や環境保全に尽力されていた、三浦二郎氏や高田勝氏らを通じて少しずつ広まってきました。

その道東におけるコクガンの調査記録としては、1984年に発行された野付半島国設鳥獣保護区設定等調査報告書作成の為に行われた鳥類調査で1983年10月23日、野付湾で1,978羽が記録（北川・藤井）、報告されたのが初めてとなります。その後、道東のコクガンの渡来状況を明らかにする目的で、宮城県の「日本雁を保護する会」と連携して、風蓮湖（担当：松尾武芳氏）と野付半島（担当：藤井）で、1986年から1989年までの期間に、コクガンの生息調査を実施しています。その結果、風蓮湖で2,000羽前後、野付半島で5,000羽程、合わせて7,000羽程のコクガンが秋季に少なくとも渡来している事が明らかとなっています。

1989年以降の道東におけるコクガンの生息状況については、継続的な調査がなされていませんでしたが、2006年から2008年まで、ラムサール条約登録に伴い野付半島ネイチャーセンターを中心に「野付半島のコクガンの生息現況調査」が環境省の委託を受けて実施されました。また2009年以降も現在まで、野付半島ではコクガンの個体数は藤井が継

続的に調査しています(写真1)。その野付半島に渡来するコクガンの個体数の推移を見ると(図2参照)、秋季は2007/2008の6,353羽が最も多く、2009/2010の568羽が最も少ない、春季は2009/2010の2,180羽が最も多く、2012/2013の0羽が最も少ない結果となりました。

この様にコクガンの渡来数に年度による大きな差異が生じるのは、コクガンの実際の渡来数の変動というより、海上を好み広い水域に分散する傾向の強いコクガンの生態と調査日の野付湾の気象条件に左右される事が大きいと考えられます。他のガン類は塹場所や集まる時間帯が明確であることから比較的、渡来数を把握することは容易ですが、コクガンの場合は、調査日が無風で順光、群れが比較的岸に寄っている事等の好条件が重なると正確な調査とならない場合が多い事があると考えています。それでも、図2から読み取れる事としては、野付半島では秋季の方が春季より多く渡来し、その数は倍以上の差がある事が分かります。また、野付半島だけでも秋季で6,000羽以上、春季で2,000羽以上が通過する年もある事が分かります。

では何故、野付半島を始めとする道東各地の湖沼に数多くのコクガンが集中的に渡来するのかは、コクガンの重要な食料であるアマモの藻場が道東各地の水深の浅い湾内に広く形成されているからです。特に野付湾は、アマモの藻場が国内最大級であることと水深が浅く、採餌がし易い環境であることから数多くのコクガンが渡来していると考えられます。

厳冬期に道東各地からコクガンが本州方面へ南下を始めると、湖面や湾内の全面凍結によってコクガンがアマモを採餌する事が出来なくなることから、道南や本州各地に分散すると考えています。

現在のところ、道東各地のアマモの藻場は現状を維持で

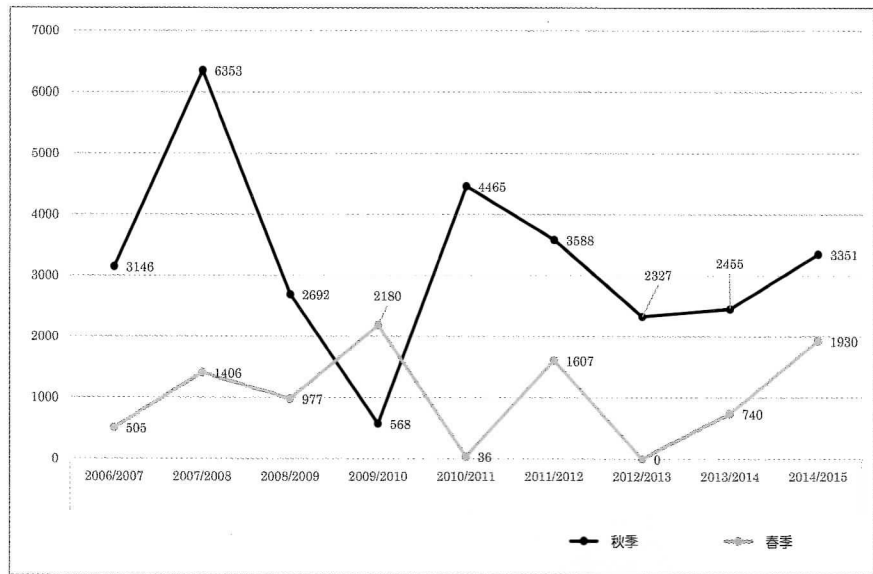


図2 野付半島に渡来するコクガンの個体数の推移(秋季と春季の最大羽数)

きていますが、1930年代には世界各国でアマモの病気による枯死が広がり、コクガンの数が、10分の1に減少した海外の事例もあります。また、その際、アマモを食べる事が出来なくなったコクガンの群れが、畑作地帯に進出するようになり穀物類への食害を引き起こし問題となった経緯があります。日本国内でも既に、上陸してイネ科植物を食べている個体(写真2)や道東の採草地に上陸するコクガンの群れも観察されています。しかし、まだ限定的なケースで、アマモに依存している事には、大きな変化は無いと考えますが、コクガンが安定して生息できる浅い海と海藻の藻場を周辺林も含めて総合的に保全する事が今後とも重要となると考えます。

「道東コクガンネットワーク」の活動

国内外のガン類については、他のガン類に比較し、コクガンが最も生態や渡りのルート・亜種区分等が明らかにされていない状況にあります。また、国内最大のコクガンの渡来地である道東地域でのコクガンの組織的な観察体制の確立を従来から、求められてはいましたが実現には至っていませんでした。

そこで、2014年度に実施された国後島の研究者との相互的なコクガンの情報交流を契機に、野付半島・風蓮湖・厚岸湾・国後島など主要な道東・南千島のコクガンの渡来地の関係者がより密接に繋がる事と東アジアに渡来するコクガンの生息状況を明らかにする事を目的に、「道東コクガンネットワーク」が発足する運びとなりました。

具体的な活動として、2014/2015シーズンは秋季(2014年11月29日実施)・冬季(2015年1月30日~2月8日実施)・春季(2015年4月11日~12日実施)の3回のコクガンを対象とした一斉カウント調査を全国16箇所、調査員48名の協力を得て実施しました。その結果(図3参照)を見ると、秋季調査では、主に国後島・野付半島・風連湖・厚岸湾の道東中心に、4,317羽を記録しました。その中でも



写真2 上陸してイネ科植物を食べている個体

野付半島が3,351羽と突出しています。また、野付半島の対岸にあたる国後島ケラムイ崎で241羽がロシア人研究者 (Maxim Antipin) より報告されましたが、これは南千島と北海道の自然環境の連続性という観点からも、今回の日露共同での鳥類調査が実現出来たことは、非常に価値があると考えています。

関連して、野付湾のククガンは日没後に少なからず湾外に出ることが観察されています。夜間にククガンがどのような行動をしているのかは非常に興味のあるところですが、今シーズンの調査では、少なくとも3,000羽程度のククガンが日没後に、飛去し湾外に出ているのが確認されています。そうすると、ククガンは終日大きな移動はせず、野付湾を主なねぐらとしていたと思われていましたが、海上も含めた別の場所にククガンの秋季のねぐらが存在している可能性もあります。この点についても日露の連携した調査で解明される事になるかもしれません。

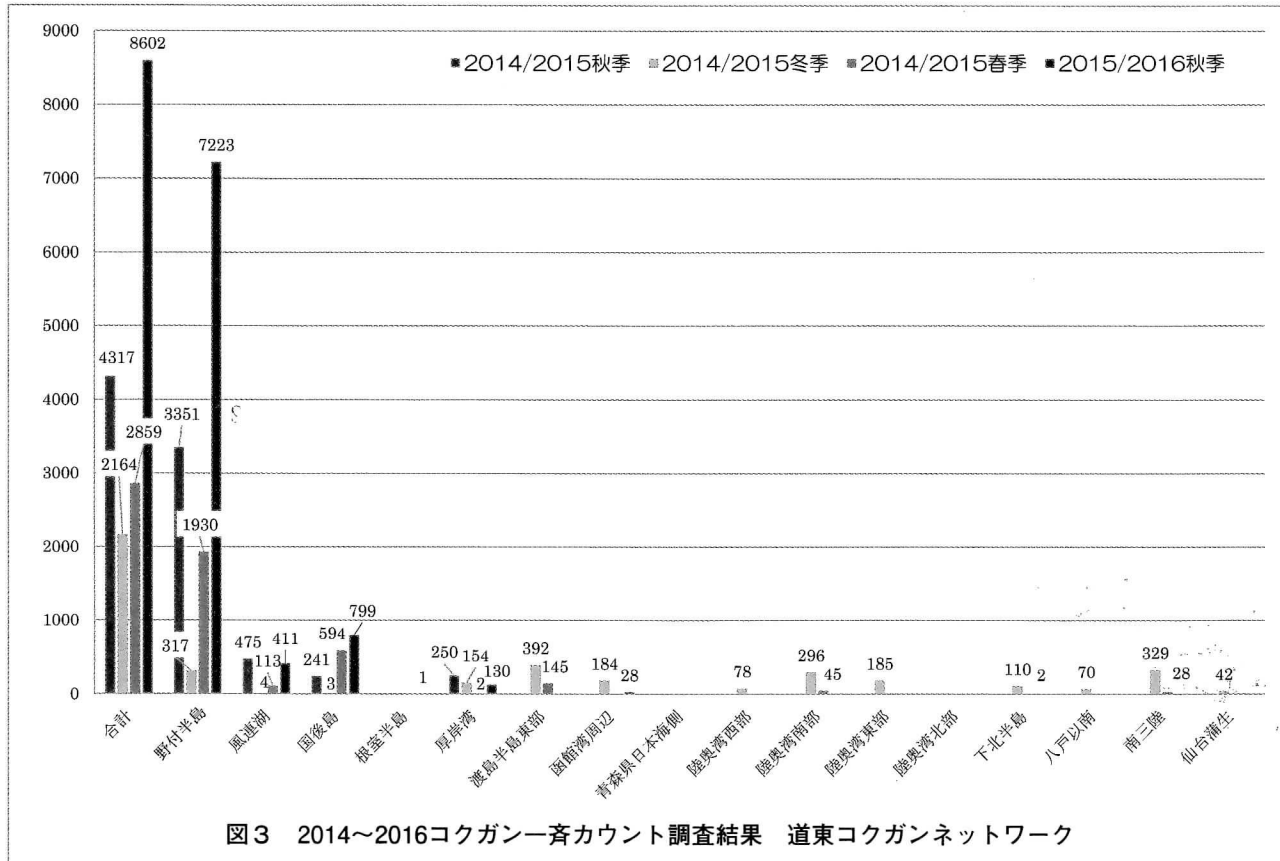
冬季調査では、道南・青森県北部・東北各地を中心に2,164羽を記録しました。これまでも函館湾や青森県北部に多くのククガンが越冬している事は知られていましたが、広範囲で重複しないデータとしてのククガンの越冬数が初めて把握された事になりました。また、これまでは厳冬期の道東では多くのククガンが南下すると思われていましたが、野付半島・風連湖・国後島・厚岸湾で、合計478羽が越冬している事も分かりました。

春季調査では、道東中心に2,859羽が記録されましたが、越冬地の道南・東北各地でも220羽が4月中旬の時期

でも残っている事が分かりました。また、2014/2015シーズンの3回の一斉調査時に可能であれば、幼鳥/成鳥の比率についても、データの収集をお願いしていましたが、その結果、風連湖で27%、長万部町国縫漁港から函館市古部漁港(旧南茅部町)で20%、同市恵山漁港(旧恵山町)から北斗市葛登支岬(旧上磯町)で23%、陸奥湾南西部で18%、平均値は22%となっています。外国の文献ではククガンの繁殖率が良い年は、30%を超える数値になることもある様なので、2014年のククガンの繁殖率は良くなかった事が伺えます。この幼鳥/成鳥の比率については、今後も重要なデータとして渡来数と共に調査していきたいと考えています。

2015/2016シーズンの道東ククガンネットワークの活動としては、ククガンの東アジアの渡来数を把握する目的で、秋季調査が2015年11月7日~15日にかけて道東中心に日本各地で実施されました。その結果(図3参照)、各地の総合羽数は、8,602羽となり、これまでの国内のククガン最高渡来羽数を記録し、また東アジアに渡来するククガンの数を、8,000羽~10,000羽と推定していましたが、それを実証する成果ともなりました。そして、ククガンの羽毛の採集も同時に行っていますので、近い将来DNA解析による亜種の特定期待されています。この後、冬季調査を2016年1月23日・24日(有効データ:1月31日まで)、春季調査を2016年4月9日・10日(有効データ:4月17日まで)に実施する予定です。

今後の道東ククガンネットワークの課題としては、秋季と春季については、比較的道東各地にククガンが集中する



傾向がある為、調査地点を限定することは可能ですが、日本国内のククガンの越冬数を把握する冬季調査については、ククガンが主に中部以北の太平洋側・日本海側の長大な海岸線や河口、港湾に広く分散して越冬している為に、どうしても調査空白地が多くなってしまいう事があげられます。東アジアのククガンの正確な越冬数を把握する為には、この冬季の調査地域をどのように埋めていくのかが今後の大きな課題となっています。更に、日本に渡来するククガンの繁殖地と渡りのルートを明確にする為には、ククガンの捕獲・標識調査が必要不可欠ですが、道東ククガンネットワーク単独では実現不可能な案件であることから、

各関係機関と連携の中で、その可能性を高めていきたいと考えています。

参考資料

藤井 薫 (2015) 生態図鑑ククガン. バードリサーチニュース Vol.12 No.3

北海道生活環境部自然保護課 (1984) 野付半島国設鳥獣保護区設定等調査報告書

野付半島ネイチャーセンター (2008) 冬季における野付半島のククガンの生息現況調査報告書

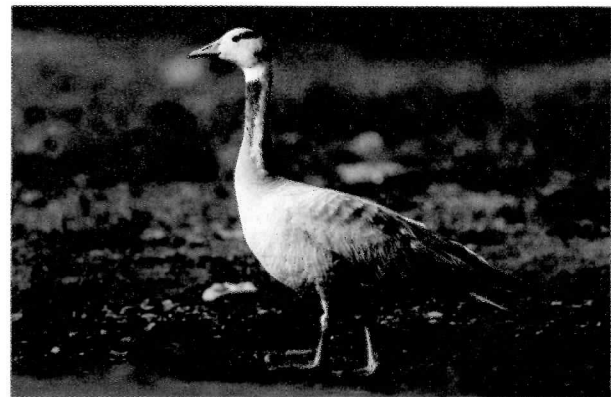
インドガン漂流記

岩見沢市 先崎啓究・先崎愛子
北広島市 先崎理之

「珍客インドガン華麗に飛来-天売島」—2015年5月下旬に届けられた新聞記事(2015/05/27北海道新聞夕刊全道)により、インドガン渡来を知った道内のバーダーは多いのではないのでしょうか。しかし実際は5月中旬に焼尻島にて初認され、新聞記事にもなった5月下旬に天売へ「小旅行」し、その後は再び焼尻島で過ごしたようです。今回はそんなインドガンの軌跡を各情報からまとめたので紹介します。

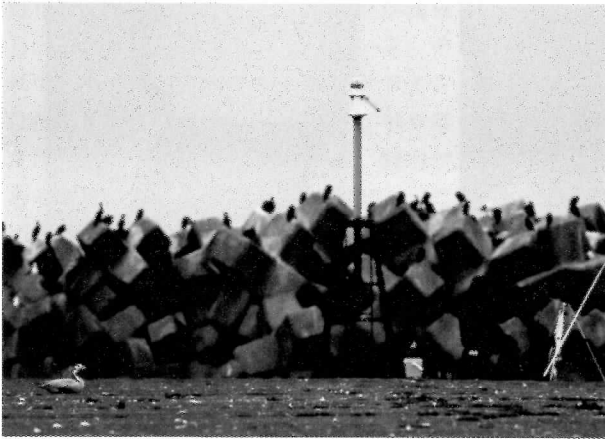
焼尻島から姿を消した後、インドガンは6月4日に稚内大沼に現れます。行動圏を本道に移し、6月中旬まで度々宗谷港で目撃されました。この情報をもとに何度か宗谷港へ探しに行きましたが会えることはできませんでした。その後、6月下旬から7月上旬までは礼文島で滞在していたことを鳥の方のブログによって知ることができました。この時点でこのまま礼文島で越夏するのかと考えました。と言うのも、ガン類は夏に風切を一気に換羽し、いったん風切の換羽が始まると新しい羽根が生え揃うまで全く飛べなくなるからです。実際に数年前、新潟県佐渡島で越夏した2羽のインドガンは風切の換羽が終わるまでゆっくりと島で過ごしたと聞いています。そんな状況の中、7月16日、釧路在住の友人から思いがけない情報が飛び込んできました。「今日友達が宗谷管内枝幸港でインドガン見たって！」—そのメールには、写真では何度も見たいインドガンの立ち姿の写真が添付されていました。

メールをもらった5日後の21日から23日まで枝幸港でようやくインドガンを観察することができました。この個体の枝幸港での暮らしぶりは実に地味で、日中は丈の低い草場で採食しては休み、を繰り返すものでした。中でも、特にイネ科植物の穂を選び、嘴でしごく様にして種子を食べ



2015年7月21日 枝幸港 撮影：先崎啓究
初認時に比べ、摩耗・退色が進んでいるが、顔にうっすらとさび色の羽が残っている。ゆっくりと近寄れば間近で観察することができました。

ていることは興味深かったです。日没後には飛び立ち、海上へねぐらを取るかと思いきや、ねぐらはなんと、陸続きのコンクリートの防波堤上でした。22、23日共に、同じ所へねぐら入りしたので、枝幸港ではこの堤防で就寝していたようです。この時はまだ不自由なく飛べていたので、これから移動する可能性も考えられました。しかし時期的にはそろそろ換羽をしないとおかしい時期です。その後、8月5日に再び観察に訪れると、まだ枝幸港に滞在していました。換羽は進行し、雨覆がごっそり抜けていたのですが、初列風切はまだ未換羽で、この日も防波堤まで飛んでねぐら入りする姿が観察できました。このまま枝幸港で風切の換羽をはじめ、越夏しないだろうかと期待しましたが、この時以降見られなくなりました。その後、このインドガンの情報は少しの間途絶え、死んだのか、それともどこかで生きているのか心配になりました。単独で行動して



2015年7月24日 枝幸港 撮影：先崎愛子
ねぐらは港内外側の防波堤上にとっていました（左下）。釣り人（右）を気にしつつも休息します。



2016年1月10日 宮城県 撮影：小田谷嘉弥
本州に渡ってからはマガンの群れに混ざって過ごしているようです。

いた上記の時期はあまり人を恐れず、どれも至近距離で観察されていることは興味深いことです。

再びインドガンの情報が届いたのは、枝幸港での終認から約2か月後の10月15日、コムケ湖（紋別市）でのことでした。よかった、ちゃんと生きていたのです。この間、枝幸と紋別の間のどこかでひっそりと風切の換羽をしていたのでしょ。コムケ湖で観察されていた大館和弘氏によると、主に亜種ヒシクイと行動し、湖にねぐら入りし、日中は少し離れたデントコーン畑でハクチョウ類などと共に採食していたそうです。単独で生活していた夏場よりも「ガン類らしい」生活を送っていた様子です。その後、コムケ湖には11月17日まで滞在し、2016年2月現在は宮城県内の伊豆沼や蕪栗沼でマガンに混ざって過ごしていると聞いています。群れに混ざると、夏場がうそのように近くで観察することは難しいようです。

さて、このインドガンという種類は、国内外で飼育数が多いため、野生渡来であるのか籠脱け個体であるのかが度々議論されたところ。今回の個体について、私たちは以下の理由から野生渡来の可能性が高いと考えました。

1. 初認時から、うっすらと顔にさび色が見られました。

これはオオハクチョウなどにも見られる現象で、鉄分が多い土壌で繰り返し採食していると、それが付着して白い羽根がさび色に染まってしまう、というものです。越冬地で撮影されたインドガンの写真をweb上で探してみると、顔がさび色に染まった個体の写真を数多く見ることが出来ます。一方、飼育個体ではどうでしょうか？私たちが調べた限りでは、このような着色した羽をもつ個体は見つけることが出来ませんでした。

2. 2015年春は韓国・中国などでもインドガンの迷行が多かった。

インドガンの本来の繁殖地は、モンゴル中央部以西で

す。しかし、それよりずっと東の中国・北京や韓国では、これまでも越冬地から北上中と思われるインドガンの迷行例があります。WebサイトBirds Koreaによると、2015年5月は特に迷行数が多かったようで、北京では5～6羽の個体が確認され、韓国では1羽がそのまま越冬したそうです。今回の個体の初認時期は、北京や韓国で確認される時期と一致しており、北上中の迷行個体の1羽が北海道までやってきた可能性はありそうです。

3. もともとインドガンは繁殖地でも人に対する警戒心が薄い。

上記Birds Koreaによると、インドガンは野生の繁殖個体でも警戒心が薄いようで、人の接近をあまり気にしないようです。ともすれば、人を恐れないことが飼育個体であることの根拠にはなりません。

以上の理由からこのインドガンは野生渡来の可能性が高いものと考えられます。この冬の越冬状況からして、今春、道内のガン類の群れの中に再び現れる可能性は非常に高いのではないのでしょうか。まだ見られてない方も是非春にインドガンを意識してガン類の群れをチェックしてみたいかがでしょうか。

参考としたWebサイトやブログ

Birds Korea

<http://www.birdskoreablog.org/?p=16397>

稚内プレス

<http://wakkanaipress.com/2015/06/08/9549>

礼文島の自然と仲間たち

<http://blogs.yahoo.co.jp/knnp027/12101552.html>

礼文町立船泊中学校-校長室より

<http://www.reikyoi.jp/funachu/index.php/%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E6%B4%BB%E5%8B%95/h27/7%E6%9C%88/>

路上の鳥たち

美唄市 藤 卷 裕 蔵

各地の街を歩いていると、マンホールの蓋、歩道のタイル、橋の欄干などに鳥の姿がよく見られる。そのような例を紹介したい。

まずは北から。

浜頓別町にはコハクチョウの渡来地となっているクッチャロ湖があり、マンホールの蓋がコハクチョウである(図1)。網走市の網走川にかかる橋にハクチョウの彫刻が二つある(図2)。一つは写真のように翼を打ち下ろした姿、もう一つは翼を上げた姿である。

釧路の鳥といえば、思い浮かぶのはまずタンチョウであろう。釧路市では、マンホールの蓋(図3)のほか街灯、バス停留所の屋根にもタンチョウがデザインされている。美唄市では宮島沼のマガンが有名であるが、どうしてかマンホールの蓋はハクチョウである(図4)。多分、マガンが有名になる前にこのデザインになっていたのかもしれない。

黒松内町にはよく知られた歌才のブナ林があり、ここに生息するクマガラが街のシンボルになっているようである。マンホールの蓋(図5)のほか、施設玄関の足拭きマットの絵もクマガラであった。瀬棚町(合併して現在は、せたな町)のマンホールの蓋はカモメである(図6)。この写真からははっきりカモメであるとは言えないが、飛んでいる姿のイメージからカモメとしておく。

江差町でもカモメである(図7)。瀬棚町と同様海岸に位置していてカモメが多いし、江差追分の歌詞にも登場する。やはり町のシンボルになっているのである。次は津軽海峡を渡って、本州。秋田県大館市の長木川にかかる橋の欄干に飛ぶハクチョウがついていた(図8)。

越谷市ではシラコバトである(図9)。天然記念物として保護されており、市のシンボルになっているとおもわれる。福井市内の板垣橋の橋名板にコサギの彫刻がほどこされていた(図10)。

長野県豊科町(合併して現在は、安曇



図1. 浜頓別町



図2. 網走市



図3. 釧路市



図4. 美唄市



図5. 黒松内町



図6. 瀬棚町



図7. 江差町

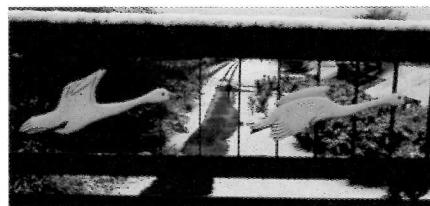


図8. 大館市

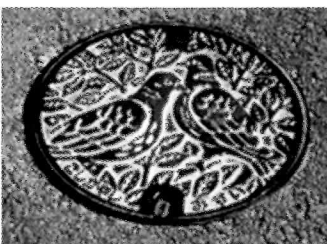


図9. 越谷市



図10. 福井市

野市)の犀川には冬にハクチョウが渡来し、このあたりの名物になっている。それでハクチョウがマンホールのデザインに採用されたのであろう(図11)。岐阜県下呂市のマンホールの蓋はサギ。冠羽があるので多分コサギだと思う(図12)。このほか、橋の欄干もサギであった。薬師如来が傷ついた一羽の白鷺に姿を変え、飛騨川で傷を癒し、源泉のありかを村人に知らせたという言伝えによる。

同じく岐阜県で、岐阜市のマンホールの蓋(図13)。絵柄はウ。長良川の鶺鴒が有名で、それにもとづくものだと思う。滋賀県湖北町は琵琶湖畔にある町。冬に渡来するコハクチョウを町の鳥に制定しており、その関係でマンホールの蓋(図14)にも採用した。

同じく滋賀県の山東町。町内の三島池が昭和34年に滋賀県の天然記念物「マガモ自然繁殖の南限地」に指定されたことで、マンホールの蓋にマガモのつがい描かれたようである(図15)。なお、湖北町と山東町の写真と説明は、湖北町の山崎歩さんの撮影・教示によるものである。鳥取県日野市の根雨はオシドリの越冬地として有名で、マンホールの蓋(図16)だけではなく、道案内、看板など町のあちこちにオシドリが描かれている。

山口県宇部市にある小野湖(ダム湖)はオシドリの越冬地としてよく知られており、越冬数も数千羽で、全国でも十指にはいる。この市でもマンホールの蓋はオシドリである(図17)。次は本州から四国に渡る。高知県高知市の歩道には絵のあるタイルがはめ込んである。その一つが天然記念物に指定されている長尾鶏である(図18)。

カササギと言えば佐賀県。「県の鳥」である。市内の歩道にうめ込まれているタイルの一つがカササギである(図19)。最近北海道でも室蘭から苫小牧にかけて生息するようになってきているが、住み着いた歴史の長さが違う。

市街地には森林や草原と違って、生息している鳥はスズメやカラス類など数種だけなので、鳥を観察する楽しみはほとんどない。しかし、以上に紹介したように、別の「鳥」を見る楽しみがある。



図11. 豊科町



図12. 下呂市



図13. 岐阜市



図14. 湖北市



図15. 山東町



図16. 日野市



図17. 宇部市



図18. 高知市



図19. 佐賀市

シルバ通信⑨

極寒の北海道に留まる鳥たち

北海道大学農学院 森林生態系管理学研究室 河村 和 洋

北海道は言わずと知れた極寒の地です。この文章を執筆している2016年1月25日現在、記録的な寒波により一段と厳しい寒さとなっています。冬には木々の葉は枯れ落ち、雪が降り積もり、多くの生き物が冬眠するため、森の中は夏に比べると寂しい雰囲気となります。鳥はというと、北海道で繁殖する多くの種が東南アジアなどで冬を越す一方で、寒い北海道に留まる鳥もいます。私はこのような北海道の厳しい冬を生き抜くたくましい鳥に興味をもちました。

北海道で越冬する留鳥として、まず思いつくのはカラ類でしょうか。カラ類とはシジュウカラ、ハシブトガラ、コガラ、ヤマガラ、ヒガラの総称です。都市公園でもその可愛い姿を目にすることができ、バードウォッチャーの皆さんが最も身近に感じる鳥たちではないでしょうか。特に冬になると、カラ類どうしや、同じくらいの大きさの鳥類、キツキ類と集まって大きな群れをつくり、行動を共にします。この群れは「混群」と呼ばれ、遭遇できれば一度に沢山の鳥を近くで見ることができ、鳥が好きな人にとっては冬の楽しみのひとつとなっています。カラ類と混群をつくる種としては、スズメ目ではエナガ、ゴジュウカラ、キクイタダキ、キバシリ、キツキ目ではコゲラ、アカゲラなどがいます。

私は12月に空知、後志においてトドマツ人工林8地点、カラマツ人工林6地点、天然林2地点で鳥類の調査を行いました。具体的には山スキーで、調査対象の林内300mをゆっくり歩き、両側50mの範囲内に出現した鳥の種と個体数を記録しました。コガラとハシブトガラは識別が困難なことで有名ですが、今回は次列風切外縁の色と鳴き声を根拠に分けて記録しました(誤認がない、と言い切るためには捕まえて嘴などを確認する必要がありますが…)。まだまだ調査地の数も調査回数も少なく、はっきりとしたことは分かりませんが、とても面白いと思うことができましたのでご紹介します。

今回の調査地で大きな混群が見られたのは、意外なことにはカラマツの3地点のみでした。これらはコガラもしくはエナガが多い群れでした。カラマツは落葉性の針葉樹で北海道ではトドマツの次に多く植栽されており、秋の紅葉など私たちを楽しませてくれますが、実は、北海道には元々分布していない種でした。戦後に人工林を急速に増やした際に、本州から持ち込まれたものです。いわば「外来種」であるカラマツの人工林で多くの鳥が冬に生活しているとすれば、それはとても興味深いことです。

一方、大きな混群はみられなかったトドマツ人工林でも、様々な鳥類がみられました。最も印象的なのは、クマ



写真1. 鳥の個体数が多かったカラマツ人工林

ゲラです。今回、クマゲラと出会ったのは70年生のトドマツ人工林で、広葉樹などもほとんど侵入していない完全な人工林でした。2羽のクマゲラがすぐ横で木を叩いてくれました。トドマツ人工林には、他のキツキ類、ヒガラやコガラといったカラ類、キバシリなどもいました。冬のトドマツ人工林に生息する鳥は私たちが思っている以上に多いのかもしれない。

今回の調査では、天然林の2地点では鳥の数が少ないという結果が得られました。空知ではアカゲラ、コゲラとハシブトガラが、後志ではコゲラとヒヨドリが少しだけでした。後志では調査を終えた帰りに、とても珍しい場面に遭遇しました。アカゲラ、ヒヨドリ、カケスの異種混合チームがフクロウを追い回していたのです！けたたましい声で追い立てられフクロウもタジタジです。私の真横のトドマツに止まってじっとしている姿は、異種混合チームの



写真2. アカゲラなどに追いかけてきたフクロウ

怒りがおさまるのを待っているようでした。フクロウの生息地としては、冬であってもやはり天然林の方が良いのでしょうか？

越冬期の鳥類の分布に関する研究は繁殖期に比べると圧倒的に少ないのが現状です。特に、北海道のような積雪地域における冬の森林での研究は、調査すること自体が困難

であることから極めて少ないのです。私は、大学4年間、山スキー部として雪山を駆け回ってきた経験を活かして、北海道の冬の鳥類の分布を決める要因を明らかにしたいと考えています。そして、最終的には繁殖期と越冬期をどちらも考慮し、効率よく鳥類を保全できるような森林管理について考えていきたいものです。

バードウォッチャーズ スケッチブック (その1)

札幌市中央区 本間康裕

ええっ、絵葉書ですか!?

北海道野鳥愛護会では年に4回、「北海道野鳥だより」という会報を出しています。会員内外から原稿を集め、編集、印刷して会員に郵送します。そのための封筒の宛名ラベル張り、封筒詰めを「発送作業」と称して3カ月に1度、幹事が集まって行います。単純作業ですから、そんなに楽しいものではないのですが、毎回それなりの人数の幹事が集まるのは、作業後に懇親の飲み会があるからだと思っています。

2015年12月、その発送作業後の飲み会の席上、アルコールが十分に回ったころ、幹事のHさんが、「ぜひ、絵葉書にして売ってほしいの」と感極まった声をあげました。隣に座っていた幹事のYさんも「そうよねえー」と言います。この年、幹事の川路則友さんが「北海道野鳥だより」に「鳥の名前の話」を連載し、それに私(本間康裕)が挿絵を描きました。それがきっかけで、皆さん、私が野鳥の水彩画を描くのを知って、その絵を絵葉書に印刷して、販売してはどうかというのです。ええっ、絵葉書にするんですか!

さらに、幹事のSさんが「私もそう思っていました」と、熱心に相槌を打ち、こうしたことに詳しいもう1人別な幹事のHさんが快く印刷作業を引き受けてくれることになって、この絵葉書ができることになったのです。Hさんは最初、「どうして、俺がこんな作業をしなきゃならないの?」と言っていたような気もしますが、酔った私の勘違いでしょう、率先して作業を買って出てくれたはずですよ。

さて、絵葉書にはおもに2015年に見られた鳥、5種を選びました。画面には鳥の学名しか書きませんでしたので、和名と、その鳥を描いた(観察した)事情や鳥への思いを以下に簡単にまとめました。

絵は自分なりに鳥の美しさを表現しようと試みましたが、いわゆる芸術的な写実画には程遠く、かつまた、図鑑などに載せる学術的な絵の精密さには及びません。中途半端なものではありますが、素人の手すさびと免じて、また野鳥への愛情をくんで、細部の誤りはお見逃しのうえ、どうぞお手に取ってごらんください。

なお、買い上げのうちは親しいご友人に贈られるのは構

いませんが、その際、練達のバードウォッチャーや鳥類の専門家への送付はおすすめしません。「色が違う」「初列風切の枚数が違う」「学名のスペルが違う」などとクレームがつかねませんからね。また、ご家庭に置かれる場合は間違っても、「額に入れて応接間に飾ろう」などとお考えなきように。トイレの壁にピンで差して、何かのはずみで落下して紛失するくらいが適当な場所だと存じます。

クマゲラ *Dryocopus martius*



Dryocopus martius

カラスじゃなかった!

札幌の旭山記念公園は写真家の大橋弘一さんの著書「北海道野鳥観察地ガイド」にも紹介されている市内屈指の探鳥地です。2015年5月26日、朝寝して、日が高くなってしまったのですが、この旭山記念公園に向きました。いい天気ながら、平日なのでほとんど人がいません。また、鳥のほうも、あまり多くは現れず、キビタキが姿を見せてくれたくらいでした。

それで今日はこの辺で帰ろうと、階段状のテラスの裏側の通路を下っていくと、何やら茂みのなかに黒い動くものが見えました…と、ここまで説明すると、多くの人は「ええっ、クマがいたのですか!」と驚かれますが、そうではない。クマゲラでした。ただ、最初はクマゲラとはわからず、カラスが木の下に何かを埋めているのだと思って、カメラも向けませんでした。ところがなんと頭が赤い。カラスじゃない! 平日の人も鳥も少ない時にこそ幸運なこと

があるものです。

はやる気持ちを抑えてカメラを取り出し、「飛ばないでくれよ」と祈りながらシャッターを切りました。茂みの枝にじゃまされない構図を狙って、少しずつこちらが位置を変えると、クマゲラはそんなことにはお構いなく、茂みの下を移動、さらに樹木の幹を登り始めました。絶好のシャッターチャンスです。少しおどけたような表情をじっくりと見せてくれて、木の幹を移ります。こちらの姿には気づいてははずなのに逃げる様子もない。その間、約30分。少し心配になってきました。なにしろ通路から見ているのですから、いつ通行人が現れないとも限らない。出会った人に、「あそこにクマゲラいますよ」と教えるべきか、知らんふりをすべきか。

その時、通路の上のほうを人が歩いてくる気配がしました。どうやら犬を連れた女性です。なにか犬に話しかけている声がします。しかしクマゲラはそのまま。すると犬はクマゲラがいるのを察知したのか、大きく吠えました。その声でクマゲラは飛び去り、私の初めてのクマゲラ撮影は終了しました。

さて、北海道野鳥愛護会の副会長、富川徹さんが代表をしている「野鳥お勉強会」という催しがあります。毎月1回、土曜日の夜、居酒屋に集まって、講師を囲んでビール（もちろん日本酒、焼酎もOK）を飲みながら、野鳥や自然の話を書くというものです。2015年6月のお勉強会の講師は日本野鳥の会江別支部長の松山潤さん。話題はクマゲ

ラでした。

野幌森林公園の保護活動に熱心な松山さんはクマゲラについて多くの知見を有しておられます。この日のお勉強会で、松山さんはクマゲラには最初に生まれた卵を捨てる不思議な行動があると紹介していました。そして、この行動を引き起こす理由をいろいろと推理され、その一つに、「撮影匠」つまりクマゲラの営巣の写真を撮ろうと多くのカメラマンが押し掛け、巣の前にレンズの放列（砲列？）を敷くことで混乱したクマゲラが卵を捨てた可能性もあるのではないかと指摘されました。

それほどに、クマゲラを追うカメラマンが多いということなのでしょう。松山さんは、こうした事態を憂うとともに、「そうしたわけで自分は無理に写真を撮ろうとしないので、クマゲラのいい写真を持っていないのです」と説明していました。

松山さんすら、ベストショットを持っていないというクマゲラの写真が、ほとんど偶然で撮れたのです。うれしい半面、無警戒に人の前に姿を現す鳥だからこそカメラマンに追い回されるのかもしれませんが。そう思うと、撮った写真をそのまま他人にお見せするのがはばかられます。などと、言いながら、その時の写真をもとに描いた絵を絵葉書にして（自慢げに）、ご披露するのも、結局は同じことなのかなあ。

悩みつつ（でも楽しんで）この絵を描いたことを付記しておきましょう。（つづく）

野鳥



情報コーナー

カラフトムシクイの観察記録

札幌市白石区 佐藤ひろみ

2015年10月28日、札幌市豊平区の豊平公園でカラフトムシクイ1羽を観察したので報告します。

私は1995年からこの豊平公園で野鳥の観察を継続し20年になります。野鳥雑誌「BIRDER」に本州の都市公園では春・秋に渡る小鳥を観察できるという記事があり、それを参考に近所の豊平公園で試してみたのがきっかけです。センサー様に記録して鳥暦をつくったり、スズメやシジュウカラ等の営巣箇所を確認したり、春季に飛来した小鳥の個体数の推移から渡りのピークを調べたりしています。

そのなかでカラフトムシクイはこの公園では1998年9月4日、1999年5月18日（未発表）に続いて3度目の記録となります。針葉樹でクイタダキのように飛び、桜の枝にいて春には盛んに囀っていたとメモがあります。この度10月28日に観察した折にはツリバナの樹でちょこまかと細かく動いていました。一緒にいた方の話では前日から居たそうです。なかなかツリバナの中から出て来ず撮影しにくかったのですが、待つことしばし、付近の樹々へ移動し小枝へ飛び出し、ホバリングして雪虫を捕食するなど目の前でい



カラフトムシクイ 2015.10.28 札幌市豊平区

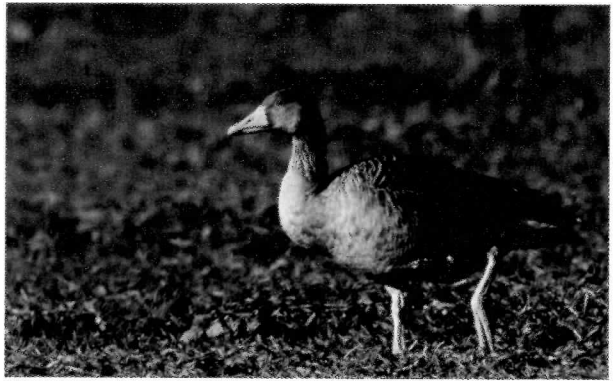
ろいろな動きを披露してくれました。動きが速くて行動をキャッチするのは困難でしたが何とか、眉斑や頭中央線、2本の翼帯、腰が黄色いという特徴を撮影できました。眉斑は額で繋がっていましたし、小枝に下垂した際、下面は白色を、足は肉褐色を帯びていました。

午前9時半から1時間ほど、一緒に居るカメラマン達を大いに興奮させた後、つぎつぎと樹々へ移動して視界から見えなくなってしまいました。尚、カラフトムシクイは2013年5月3日天売島にて愛護会の観察会でも確認され、野鳥だより173号に掲載されています。

ハイイロガンとの出会い

江別市 若狭 隆

長沼町と千歳市の境界にある長都沼には秋口から何度か猛禽類の撮影観察に通っていましたが、2015年11月13日午後12時25分頃に長都沼駐車場に併設されている野鳥観察台から約300m先の畑にいるオオハクチョウの群れの中にハイイロガン1羽を確認しました。その日、観察台には朝の9時頃から上がって周囲を見渡し、オオハクチョウの群れも9時頃より確認していました。群れの中にヒシクイかマガンが居るなぐらいの認識でいました。時間も正午すぎになり撮影を終了する前に改めてオオハクチョウの群れにレンズを向けて、写真撮影で拡大してピンク色の嘴を認識して見慣れない野鳥がいる事を見つけ、写真撮影の為に車で群れに近づき普段から持ち歩いている野鳥図鑑でハイイロガンと特定できました。状況から推察しますと、早朝よりオオハクチョウの群れと一緒に行動していたと想像できます。翌日も長都沼周辺を見て回りましたが、ハイイロガンは確認していません。オオハクチョウの群れには、ヒシク



ハイイロガン 2015.11.13 千歳市長都沼

イ、マガン等と一緒にいる事が多く、昨年はシジュウカラガン1羽、カリガネ1羽が、今年もハクガン2羽と一緒に居るのを確認していたので、注意して見ていたのが今回の発見につながったと思います。

※ 編集部注：北海道鳥類目録改訂4版（藤巻 2012）によれば、北海道内のハイイロガンの記録としては、迷鳥として、1981年10月ウトナイ湖ほか6例などがあります。

石狩の浜でハマヒバリ

札幌市北区 山中 勇

2015年11月30日、石狩湾新港東埠頭や石狩川河口で鳥の撮影をして帰る途中のことです。石狩浜海浜植物保護センターの手前でキタキツネの姿が眼に入りました。逆光気味で毛並みが輝いていい感じです。早速車を止め、カメラを手にキタキツネの方に歩み寄りしました。すると、不意に白っぽい鳥1羽が地面に降りてきました。第一印象はツグミ、でも何か白っぽい。正直あまり興味を惹くものではなかったのですが、今季はまだあまりツグミを撮っていないので一応は望遠レンズを向けてみました。するとファインダーに飛び込んできたものは何とびっくり・・・何だっけ？誰だ？パッと名前が出てこないけど、多分ハマヒバリか・・・とおぼろな記憶を辿る。ファインダーで見ると頬の黄色が印象的。特徴的なツノは小さくて目立たない。地面で何か採餌でもしていたのでしょうか。出会いはほんの1分足らず。ピッ、ピッと小声で鳴いて飛び去ってしまった。飛び方はセキレイに似ていたように思います。



ハマヒバリ 2015.11.30 石狩市

周囲にはムクドリが沢山群れていて、地面に降りたり電線に止まったりを繰り返していました。ツグミも見られましたが、ハマヒバリを見たのはその1回だけで、他種と群れている様子はありませんでした。

※ 編集部注：北海道鳥類目録改訂4版（藤巻2012）によれば、北海道内のハマヒバリの記録としては、希な冬鳥として、1997年3月中川郡豊頃町ほか5例があります。



表紙の鳥

ホシムクドリ

(カラー写真は<http://www.aigokai.org>に掲載)

ムクドリの群れを見つけた時は必ず「ホシムクドリ、いないかな？」と1羽づつ双眼鏡で確認していました。数年そんな習慣を続けても会えずにいたホシムクドリ。この日は河畔をホシムクドリ3羽だけで行動していました。

大阪 徳美 (旭川市)



ウトナイ湖
2015. 11. 8
札幌市西区 北山 政人

天気予報によると、気温は低く、雨です。場所によっては平地でも雪が降るともありました。探鳥会日和とは決して言えない空の下、探鳥会幹事としては気持ちが沈んでしまいそうな寒い雨の朝でした。しかし、悪天候のなか、続々と集合してくれた参加者の方々の熱意と情熱に感動し、気分良く探鳥会を始めることができました。スタート直後、野生鳥獣保護センターの駐車場付近で数羽のカササギを見る事ができました。苫小牧とその周辺では数が増え、札幌の市内でも目撃例ができました。以前よりは、観察頻度が上がり観やすくなった鳥ですが、カラス科の種類としては、綺麗な姿なので、探鳥会での人気者には変わりないようです。平地に下りてきたカケスも同じ場所に現れました。ツグミの声に気が付き、空を見ると、上空を数羽の群れが行きます。この秋は冬鳥の南下が早い傾向があるような気がします。札幌周辺をはじめ、自分がこの秋に行った場所ではそう感じる事が多かったです。そう思って湖畔に出ると、遠くにオオハクチョウやマガモやオナガガモなどが見られました。ここ最近、北海道でも増えてきたカワウが飛び、ダイサギが数羽、餌を探しています。なぜか、北海道でいちばんよく見られるはずの大型のサギ、アオサギが一羽も見られませんでした。冬は本州に移動する個体が多いとは言え、越冬個体もいるはずなので、少し寂しい気がしました。オオタカの茶色味が強く、胸に縦斑がある、今年生まれの個体が参加者の皆さんの目の前を横切っていました。道外へ渡ってゆくのか、ここで冬を越すのか解りませんが、幼鳥には試練の冬となるのは間違いありません。地鳴きからするとハシブトガラに間違いのない鳥が出現しました。北海道にはよく似たコガラもいるので、間違いなく、両種の識別は野鳥観察者泣かせの難問でしょう。湖畔を離れて森の中を歩いた時、近くで見られた個体は大雨覆の先だけが帯状に白く、次列風切の白さも目立たないので、ハシブトガラでした。個人的にはこの二種の識別には、鳥を見ていく限り、勉強していきたいです。鳥を見るには良い状況ではなかったのですが、記録された種類数も多く、無事探鳥会を終えて、担当幹事は安心しました。皆さん、寒いなか本当にご苦労様でした。私にとって、ウトナイ湖はたくさんの思い出が詰まった、特別な探鳥地のひとつなので、いつまでも野鳥の聖域としてあり続けてほしいです。

【記録された鳥】ヒシクイ、マガン、コブハクチョウ、コハクチョウ、オオハクチョウ、ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、コガモ、ホシハジロ、ホオジロガモ、カワアイサ、アカエリカイツブリ、カンムリカイツブリ、キジバト、カワウ、ダイサギ、オオバン、ユリカモメ、シロカモメ、オオセグロカモメ、トビ、オジロワシ、オオタカ、ノスリ、ハヤブサ、カケス、カササギ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ツグミ、ベニヒワ、シメ、ミヤマホオジロ、アオジ
以上41種

【参加者】秋元美弥子、今堀魁人、小倉史恵、鹿川美咲、金子喜映・洋子、北山政人、齊藤由美子・佑朱、品川睦生、島崎康広、島田芳郎・陽子、清水朋子、高橋良直、田中さちよ、田村修一・裕子、中正憲信・弘子、畑 正輔、原 美保、本杉政司・朋子、横山加奈子、吉田慶子、吉中宏太郎・久子、鷺田善幸
以上29名
【担当幹事】北山政人、鷺田善幸

野幌森林公園
2015. 12. 6

【記録された鳥】トビ、オオタカ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、キレンジャク、ヒレンジャク、ゴジュウカラ、キバシリ、ツグミ
以上17種

【参加者】秋山洋子、今村三枝子、大表順子、加藤茜湖、金子喜映・洋子、鎌田恵実、小西美美枝、小堀煌治、齊藤由美子・佑朱、品川睦生、島崎康広、白澤昌彦、高橋貞夫、道場 優、戸津高保、中村 隆、畑 正輔、早坂泰夫、菱谷紀久子、廣木朋子、藤田 潔、辺見敦子、松原寛直・敏子、山本育子、横山加奈子、吉田慶子
以上29名
【担当幹事】道場 優、早坂泰夫

小樽港
2016. 1. 17
札幌市中央区 福島 文

初めて北海道野鳥愛護会の探鳥会に参加させていただきました。毎朝のウォーキングコースで偶然出会ったアオサギとキレンジャクがきっかけで探鳥を始めたのですが、1年未満の初心者です。日々のウォーキングしながらの探鳥なので、限られた場所が多く、遠出をした事もなかったため、今回のイベントを大変楽しみにしておりました。当日満席のバスで出発し、天候も快晴！小樽へ向かう途中も車中からオジロワシの姿を何度か見かけ、こんな所に！と驚きでした。最初に観察した日和山灯台に着くと頭の上をたくさんのカモメが低空飛行している事にも驚き！そして日本海の荒波の上に海鳥がたくさんいるらしい…が、普段こんなに遠くの鳥を観察したこともなく、なかなか見つける事ができません。でも皆様が親切にスコープでの観察を勧めて下さり、たくさん海鳥を見る事ができました。その都度見分け方や生態等も教えていただき、何度かスコープで見せていただきながら自分の目で確認できた時はうれしかったです。探鳥会ではありましたが野生のトドの大群には本当に驚きました！ その後も何ヶ所か港を廻り、今度は近くで観察。先程まで遠目で見ていた海鳥達の自然の美しい姿を見て感激でした。初めて間近に見たシノリガモの何ともアーティスティックな紋様。白いチークと頭の形がかわいらしいホオジロガモ。その他〇〇アビ、〇〇ハム、〇〇カイツブリ…初めて耳にする名前を皆様が教えて下さり、これは帰ってからゆっくり図鑑で勉強しなくては！と思いました。休憩タイムでもハヤブサに出会い、帰りのトイレ立寄時も双眼鏡は最後まで離さずに！のご指導のもと時間ぎりぎりまで探鳥を楽しみました。皆様ありがとうございました。

【記録された鳥】 マガモ、シノリガモ、ビロードキンクロ、ホオジロガモ、コオリガモ、ウミアイサ、アカエリカイツブリ、カンムリカイツブリ、ミミカイツブリ、ハジロカイツブリ、アビ、オオハム、シロエリオオハム、ヒメウ、ウミウ、カモメ、ワシカモメ、シロカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、ウミガラス、ウミスズメ、コムミスズメ、トビ、オジロワシ、オオワシ、ハヤブサ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒヨドリ、ツグミ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ドバト

以上36種

【参加者】 浅田陽子、白田 正、梅木賢俊、太田由美子、岡部良雄・三冬、北川博一、北山政人、栗林宏三、近藤直人、齊藤佑朱、佐賀テエ子、志田博明、品川陸生、島崎康広、島田芳郎・陽子、清水朋子、鈴木恵子、竹内 正、田中さちよ、辻 雅司、土屋妙子、戸津高保、中島房子、中正憲信・弘子、中田勝義、中村 隆、菫沢千代、畑 正輔、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城、廣木朋子、福島文、藤田恵子、本間康裕、松原寛直・敏子、村田陸子、本杉政司・朋子、山本昌子、横山加奈子

以上45名

【担当幹事】 梅木賢俊、栗林宏三、畑 正輔

野幌森林公園

2016. 2. 7

【記録された鳥】 コゲラ、アカゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ゴジュウカラ、キバシリ、マヒワ、ベニヒワ

以上12種

【参加者】 今村三枝子、大表順子、川村宣子、栗林宏三、後藤義民、小西美美枝、齊藤由美子・佑朱、佐藤ひろみ、品川陸生、清水朋子、白澤昌彦、杉田範男、高橋貞夫、田中さちよ、谷岡康孝、辻 雅司、戸津高保・以知子、中田勝義、畑 正輔、早坂泰夫、廣木朋子、藤田 潔、辺見敦子、本間康裕、松原寛直・敏子、三井 茂、横山加奈子、吉田慶子

以上31名

【担当幹事】 早坂泰夫、松原寛直

鳥民だより

◆ 野鳥写真展と写真募集のお知らせ

会場：札幌エルプラザ 2階 展示スペース
(札幌市北区北8条西3丁目)

JR札幌駅地下直結または北口出口の北向い

期間：平成28年5月1日(日)～5月10日(火)

展示時間：9:00～22:00

(ただし初日は10:00から、最終日は16:00まで)

応募要領：写真は、最近3年以内に原則として北海道内で撮影したもので、サイズは四つ切、デジタル写真はA4版。鳥の名前・撮影者・撮影年月・撮影場所を必ず添付してください(原則として一人2枚以内とします。3枚以上の場合は展示優先順位を明記してください)。

募集締切：4月25日(月)まで必着にて、愛護会事務所(北海道自然保護協会内)に送付あるいは直接届けてください。

(〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目 加森ビル5階 自然保護協会気付 北海道野鳥愛護会 宛て)

準備・展示作業：

4月28日(木)14:00～事務所にて額付・キャプション作成、
5月1日(日)9:00～会場にて展示作業を行います。

両日とも、お手すきの方はご協力をお願いします。

*なお、引き続き野幌自然ふれあい交流館で6月に1ヶ月間の展示を計画しております。

【お問い合わせ】 小堀 煌治 (011-591-2836)
畑 正輔 (011-894-0017)

◆ 総会のご案内

日時：平成28年4月13日(水) 18:30～

場所：かでる2・7 110会議室(1階)
(札幌市中央区北2条西7丁目)

※総会終了後に懇親会を予定しています。

【お問い合わせ】 畑 正輔 (090-3117-4261)

【新しく会員になられた方々】

先崎 愛子・啓究 (岩見沢市)
前田 美紀枝 (札幌市東区)
角野 節子・明弘 (札幌市東区)
青木 武男・あけみ (札幌市清田区)
石井 健太 (札幌市南区)
山中 勇 (札幌市北区)
岩井 茂 (岩内郡共和町)

一宿泊探鳥会(旭岳)のお知らせ

平成22年(2010年)以来3回目の旭岳宿泊探鳥会です。旭岳温泉周辺ではコマドリ、ビンズイ、ベニマシコなど、ハイマツ帯では、カヤクグリ、ノゴマ、ギンザンマシコ、ホシガラスなどが期待されます。1日目は姿見駅周辺で、2日目は温泉周辺で探鳥の予定です。この時期は、高山の花も楽しめます。

月 日 7月2日(土)～3日(日)

集合場所 札幌駅 北口「鐘の広場」

集合時刻 2日(土)7:15

行程等

1日目：札幌駅北口→昼食後、姿見駅周辺で探鳥→旭岳温泉(泊)

2日目：旭岳温泉周辺(湿原探勝路)で探鳥→昼食後、札幌へ→札幌駅北口

札幌帰着 3日(日)17:00頃の予定

定員 45名

参加費用 21,000円(バス代、宿泊代、旭岳ロープウェイ料金等。食事は2日昼食から3日昼食まで)

宿 泊 大雪山白樺荘(電話0166-97-2246)

申込受付 4月1日(金)9:00から電話受付。
(定員になり次第締め切ります)

申込み先 佐々木 裕 宿泊探鳥会担当幹事
電話011-596-2660

※午前中は電話が混み合い、お待ちいただくことがあります。話し中でも、ツーツーというお話し中の音は発せられませんが受付いたしておりますので、おかけ直してください。

旅行代金 申込み終了後から4月15日(金)までに下記口座にお振込みください。

北洋銀行札幌駅南口支店

口座名(株)エイチ・ピー・シー・ビジョン

口座番号(普通預金)3790202



- ☀ 探鳥会 (宿泊探鳥会を除く) は、どなたでも参加できます。参加費無料。事前申し込み不要です。直接、現地に集合してください (昼食、双眼鏡等の観察用具、筆記具等をご持参ください)。
- ♣ 集合場所等については、愛護会ホームページ「探鳥地紹介」でお確かめください。
- ☂ いずれの探鳥会も悪天候でない限り実施します (小雨決行)。
- ☀ 探鳥会の開催を変更・中止する場合がありますので、愛護会のホームページでお確かめください。
- ♣ 交通機関の運行時刻等については、最寄りの営業所等にお問い合わせください。

【探鳥会の問い合わせ】

北海道自然保護協会 ☎011-251-5465 10:00~16:00 (土・日曜日、祝日を除く)

開催日	探鳥地	集合場所及び集合時刻
4月17日(日)	モエレ沼	ガラスのピラミッド前 9:30
	中央バス：地下鉄東豊線環状通東駅発 (北札苗線東69番・東79番) 「モエレ公園東口」下車、徒歩15分。 開水後の沼に浮かぶカモ類やオオバンなどの水鳥群、沼畔・湿地・草原や公園林の小鳥類を楽しみます。	
4月24日(日)	宮島沼	湖畔 10:00
	中央バス：岩見沢ターミナル発 (月形行) 又は月形駅発(岩見沢行) 「大富農協前」下車、徒歩10分。 北への渡り途中のマガンたちが集結します。湖面で羽を休め、えさ場を行き来する姿は壮観です。暖かい服装で。	
4月29日(金)	野幌森林公園	大沢口 9:00
	夕鉄バス：新札幌駅発(文京台南町行)「大沢公園入口」下車、又はJRバス：新札幌駅発(文京台循環線)「文京台南町」下車、徒歩各5分。 夏鳥たちが渡ってくる時期です。木々の芽が開き始めた森の中を、鳥たちのさえずりを聞きながら歩きます。	
5月5日(木)	藤の沢	白鳥園 (エルクの森パークゴルフ場向い) 9:00
	定鉄バス：札幌駅発又は地下鉄真駒内駅発 (定山溪温泉行又は豊滝行) 「藤野3条2丁目」下車、徒歩10分。 藤の沢小鳥の村とその周辺をウグイスやオオルリなどの声を聞きながらゆっくりと巡ります。	
5月8日(日)	野幌森林公園	大沢口 9:00
	4月29日の案内を参照してください。 木の間に見え隠れするキビタキ、梢でさえずるオオルリなど魅力いっぱいです。	
5月15日(日)	千歳川	さけますふ化場手前の橋付近の広場 8:00
	公共交通機関はありません。 千歳川沿いに発電所ダムまで行きます。たくさん夏鳥が見られます。ヤマセミも期待されます。	
5月22日(日)	鶴川河口	むかわ温泉四季の館駐車場 9:45
	道南バス：札幌駅前又は大谷地バスターミナル発 (浦河行/ベガサス号) 「四季の館前」下車。 鶴川河口と人工干潟のシギ・チドリ類がメインです。時にはチュウヒやハヤブサも現れます。	
5月29日(日)	野幌森林公園 (早朝探鳥会)	大沢口 6:30
	早朝のため公共交通機関はありません。 今年から始まった早朝探鳥会です。夏鳥の囀りを聞きながら早朝の森を歩きます。春の草花も真っ盛りです。	
6月5日(日)	植苗ウトナイ	JR千歳線植苗駅前 9:10
	JR千歳線「植苗」下車。 鳥の囀りを聞きながら植苗駅からウトナイ湖へ向かいます。道沿いの森や湖畔草原の鳥たちを楽しみます。	
6月12日(日)	厚別川	川下公園駐車場 9:00
	中央バス：地下鉄東西線白石駅発 (川下線白24番) 「川下公園」下車。 厚別川の堤防を歩きます。草原の鳥が勢揃いし、林の鳥たちも楽しめます。	
6月19日(日)	野幌森林公園	大沢口 9:00
	4月29日の案内を参照してください。 鳥たちにとって一番忙しい子育ての季節です。初夏の花も咲きそろい、鳥と野の花の両方を楽しめます。	
6月26日(日)	福移	福移小中学校前 9:00
	中央バス：地下鉄環状通東駅発 (北札苗線) 「福移小学校通」下車、徒歩5分。 石狩川堤防内外の草原や、石狩川・豊平川合流点の鳥を楽しみます。カワセミも期待されます。	

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人 2,000円、家族 3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465

HPのアドレス <http://www.aigokai.org>